



『白樺』ロダン号表紙 明治43(1910)年11月

ロダンの「小さなスフィンクス」をモデルにした実篤のデッサン 大正14(1925)年▶
モデルの彫像は、数ある実篤の美術品コレクションの中でも大正9(1920)年と、ごく早いうちに手に入れられ、晩年まで身近に置かれて、くりかえしスケッチされた。

あなたも!

実篤記念館でお気に入りの作品を見つけて、描いてみよう!
そして、なぜ気に入ったのかも考えてみよう!

こんな人

オーギュスト・ロダン (1840~1917年)

人間の内面や葛藤を表現する作風で、近代彫刻の父と称されるフランスの彫刻家。
「地獄の門」「考える人」などで知られる。

『白樺』でロダン号を出す

ロダンに夢中になっていた白樺派の作家たちは、『白樺』でロダン70歳の誕生日を記念する号を出そうと企画しました。

ところが、ロダンの誕生日には2説あって、どちらが正しいか分かりません。そこで、フランス語の読み書きができた有島生馬が手紙でロダンに質問したところから、白樺派とロダンの交流が始まります。

その返事には、ロダンの肖像写真が同封されていたほか、日本の浮世絵に興味があるので、それと自分のデッサンを交換したいということが書かれていました。

実篤たちはお金を出しあって、全部で30枚の浮世絵をロダンに送ります。そのお礼として送られてきたのが、3点のブロンズだったのです。遠い日本の、当時まだ無名な若者たちが、自分に関心を持ってくれたことがとても嬉しかったのでしょう。

フランス国立ロダン美術館には、ロダンと白樺派の交流を物語る浮世絵や書簡などが、今も保存されています。

